

朝日 歌壇 俳壇



「日曜日のブローチ 21」 junaida

うたをよむ 世界や未来をも映す鏡

菅原百合絵

短歌は日本的な詩型だと言われるが、初期の和歌が万葉仮名によって表記された歴史や、漢詩的な着想からの濃密な影響を考へても、必ずしもそうとは言えない。そもその成り立ちに異邦性を孕む短歌が、世界に目を向け、時代を映す鏡となるのは当然とも言える。

政権を支持する友が美しくこちらへリモコンを構える 千種創一

千種創一『砂丘律』では、中東に赴任した作者の生活と、テロや虐殺など緊迫

した事件が地続きで描かれる。何気ない友人の仕草ですら、銃口を向けられるように感じる。「政権」の背後には、それほど深い分析が横たわっている。自爆テロはいま kamikaze と呼ばれ、若く死にゆくことのみ似たる

松本実穂

バタ克蘭劇場での大惨事によって記憶される十年前のバリ同時多発テロ事件発生時、フランスに住んでいた作者は、当時の空気を鋭く捉えている。中東で

の情勢悪化は欧州にも及び、テロが相次いだ。フランスでは自爆テロは「カミカズ(神風)」と呼ばれる。日本の悲壮な過去が七〇年後の欧州に反響する。時代を映す鏡。しかし歌が見せるのは過去だけではない。

摩天楼はマリアなのだね ジェット機は天使なのだね 受胎告知図

大滝和子『人類のヴァイオリン』

二〇〇一年の九・一一同時多発テロを詠んでいるようにしか見えないこの歌、実は二〇〇〇年刊行の歌集に収められている。予知夢なのか、偶然の一致なのか。歌は恐ろしい鏡でもある。(歌)

第61回短歌研究賞 短歌研究社主催。彼万智さんの20首詠「白き父」に決まった。〈心って燃えるんだっけ骨となり箱詰めされてゆく白き父〉

馬場めぐみ歌集「無数を振り切っていけ」

2011年の短歌研究新人賞受賞作を含む第1歌集。「身を投げる無数の窓を振り切って生き延びて今晴れた公園」(短歌研究社・2420円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき

◆高山れおな選

山の日の山の数ほど秋の星
(青森市) 天童 光宏

折り紙の裏は真つ白原爆忌
(神戸市) 山口 誠

猛暑日のなりはひ五感怪しうす
(鶴ヶ島市) 佐野 静子

秋日傘ひとりぼつちを隠しけり
(柏市) 田頭 玲子

盆用意先ずは座布団干しにけり
(東京都世田谷区) 百瀬 俊夫

落蟬や母に呼吸器付けし日よ
(神戸市) 清田しおり

雲梯にぶら下がる子ら終戦忌
(我孫子市) 相川 健

蟻の列特訓受けし成果あり
(長崎市) 下道 信雄

兄弟で作る焼そば夏休み
(小金井市) 二瓶みち子

ヒトは水はヒトなりヒロシマ忌
(金沢市) 前 九疑

【評】天童さん。星の数と山の数対比が面白い。山のリフレインも効果的だ。山口さん。もちろん千羽鶴からの連想だが、着眼が鋭い。蒼白、白紙状態、無—そこに万感がこもる。佐野さん。持ってまわった言い方が、可笑しくて恐ろしい。

◆小林貴子選

止める者なきが口惜し原爆忌
(堺市) 松本みゆき

家庭内流行り廃りのアイスかな
(長崎市) 村山信一郎

上を向いてもこぼる涙御巣鷹忌
(高萩市) 小林 紀彦

秋刀魚うましまだB面のありにけり
(北本市) 萩原 行博

四匹に友の名つけて金魚飼ふ
(松山市) 正岡 唯真

落下傘の布夏服にせし戦後
(さいたま市) 齊藤 眞人

原爆忌気温はたった四十度
(ふじみ野市) 麻生結希子

虫籠を提げ近道を走りゆく
(千葉市) 佐藤 豊子

旅先に本屋を巡る夏休み
(佐伯市) 川西 敦子

初めて蚊帳のとは口見つからず
(宇都宮市) 松広 訓

【評】一句目、原爆投下から八十年、世界情勢に愁いを感じるばかり。二句目、この前までみんなあれが好きだったのに、今はこっち。何とも平和な日常だ。三句目、日航ジャンボ機墜落からは四十年。四句目、レコードならぬ秋刀魚の裏面。

◆長谷川權選

水旗これぞ平和の御旗なり
(栃木県壬生町) あらゐひとし

八月や三日おきなる鎮魂歌
(東京都世田谷区) 須藤 渉一

緒方貞子在さは如何んが夏の
(いわき市) 齊藤三津枝

真夜中に団扇手にとる孤独かな
(藤沢市) 中川 節子

影のなき爆撃機なり八月来
(京田辺市) 加藤 草児

これ以上落とせぬ腰や阿波踊
(相模原市) 志村 宗明

雑炊の草の匂ひや終戦日
(小山市) 松本 喜雄

朝食の後の一睡夏の贅
(越谷市) 花井芳喜代

夢のなき夢の始まり原爆忌
(横浜市) 三玉 一郎

あつてなく昼寝の人となりけり
(金沢市) 岩本 卓夫

【評】戦争の句あまた。一席。波に千鳥飛ぶ水屋の旗。俳句の旗でもある。二席。広島忌、長崎忌、日航忌、終戦忌。もう増えないで。三席。今いて欲しい人。ガザの悲惨をみるたび、誰でも思うこと。十句目。この境地も悪くない。八十三歳。

◆大串 章選

終戦日父の復員あつて今
(川崎市) 大森 実

語らねば消えゆく記憶長崎忌
(大村市) 小谷 一夫

生きながら人焼かれたる原爆忌
(東京都杉並区) 漆川 夕

戦場の生命救いし終戦日
(西宮市) 三鼓 泰正

病死餓死焼死に溺死敗戦忌
(羽咋市) 北野みや子

終戦の詔勅聴きし胎内に
(鎌倉市) 羽賀 一男

終戦日父の日記に天気のみ
(市川市) をがはまなぶ

語り継ぐ人の未来や原爆忌
(福島県伊達市) 佐藤 茂

空蟬の命のかたちなほたもつ
(倉吉市) 尾崎 慎雄

半世紀この地に居付き地獄盆
(伊丹市) 保理江順子

【評】第1句。8月15日に大戦終結。父が戦地から帰還できたからこそ今の自分がある。第2句。戦争の悲惨は語り継がねばならぬ。昭和20年8月9日、長崎に原子爆弾が投下され数多の人命が殺傷された。第3句。「生きながら」が切ない。